

50年前のこと50年後のこと

－持続的発展の基本デザインは？－

東北支所長 堀田 庸



還暦も近くなると昔のことを思い出すようになる。50年前、私が小学生の頃に遊んだ近くの山はネズミサシやコシダに小さなアカマツがしょぼしょぼと生えているいわゆる禿げ山であった。40年前は大学受験の頃である。森林・林業に関して今でも思い出す新聞記事がある。一つは、篤林家が山に肥料をやっているというニュース、もう一つは、確か奈良県の十津川源流の自然保護について京都大学の四手井先生が論じられていたことである。昭和30年代の後半における、森林に対する国民のニーズは木材生産の増強であった。生産力増強を目指した「拡大造林」により現在の人工林の基礎が作られた。また、木材の輸入が自由化されたのもこのような情勢が背景にある。

この50年で森林・林業を取り巻く社会・経済情勢は大きく変化した。

林業白書によると、スギ立木1m³により雇用できる作業員数は、昭和36年で11.8人、平成10年では0.7人である。40年弱で1/17となった。これが一般の工業製品のように技術革新で成し遂げられたのなら問題はないが、林業の生産性は向上したのだろうか。昭和35年には林業に従事している人口は26万人、素材の生産量は4000万m³、生産額は4000億円前後である。平成10年では9万人、素材生産量は60%前後に低下したが生産額はほとんど変わらない。すなわち、労働生産性が多少向上したが工業生産のような飛躍的向上はみられない。平成11年度の山元の1m³当たりのスギ立木価格は1万円になっており、昭和35、36年とほぼ同額であることから林業が経済的に大変苦しい状況にあることがわかる。一方、林業が低迷している反面、森林が持つ多様な機能についての知識は深まり、その重要性が社会的に認知されるようになってきた。

「持続的発展」が近年のキーワードとなっている。しかし、その実現のために森林・林業が受け持つ役割についてのデザインは描かれていない。また近年、急激に発展しているバイオテクノロジーや情報技術からも持続的発展のためのデザインは提示されていない。科学技術は未だに「持続」に不可欠な物質循環とエネルギーフローに関わる基本的なデザインの提示が出来ない状況にある。

土地とその上に成立する緑資源や多様な生物は想像を越える時間をかけて、調和的な物質循環とエネルギーフローのシステムを構築してきた。バイオや情報技術が飛躍的に発展しても、生態系が持つ機能を越えることはできないであろう。物質循環とエネルギーフローには様々な大きさのシステムがあるが、経済効率から人間はますます大きなシステムを選択する方向に進むであろう。しかし、持続的発展のためには「小さなシステム」を再評価する必要があるのではないだろうか。すなわち、緑資源を中心にした、地域で循環するシステムを再評価する必要があるのではないだろうか。

50年前に比較して緑が豊かになったが森林資源としてはまだ未熟である。生態系として成熟するにもさらに数十年かかるであろう。数十年後の世界を描きつつ研究を進めなくてはならないと思う。